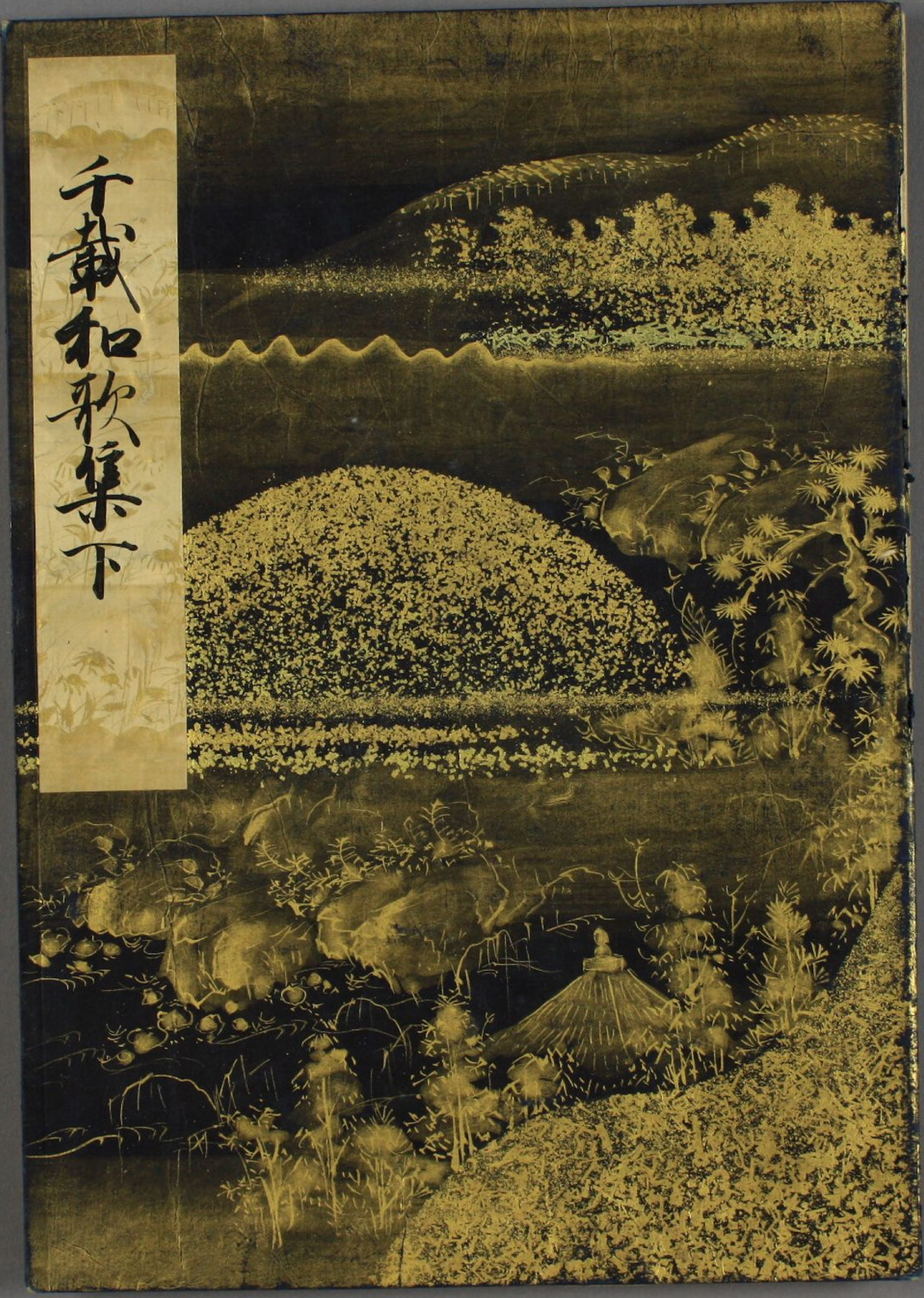
千載和歌集　下



九曜文庫

千載和歌集巻第十一

恋哥一

堀河院の御時百首哥てまつりける
時しのふるこひのこゝろをよめる

源俊頼朝臣

なにはえの藻にうつもるゝ玉かしはあらはれてたに人を恋や

二条太皇太后宮肥後

またしらぬ人を初てこふる哉思ふ心よみちしるへせよ

前斎院河内

わか恋はやしほふるめの色かはゝそれともみえすあるまと

権中納言俊忠中将に侍りける時哥合
し侍りけるにしのふるこひのこゝろをよめる

後二条関白家筑前

おもふよりいつしかぬるゝ袂かなゝみたそ恋のしるへなる
なんなかにけるをしけり

藤原長能

ゆく川のせゝの破まをわくるいさり舟あふみのなかにおもひそめ

題不知

延久第三親王輔仁

いかにせんおもひを人にそめなからいろに出しと思ふこゝろを

徳大寺左大臣

一かみ人ハ雁ととゝ志ゝ雲ゐらくの空なからこゑをすらむ

中院右大臣

浪ゝめとと渡よ袖の中まて恋せとと人よ志ゝれなか

大納言成通

つれとも思ふ人よあかりねまハとそ千すゝれ世まかさか

百首哥よみてまつりける時恋の哥とてよみ侍ける

大炊御門右大臣

大かたの恋するくへよ思ひされてよそのゝ乃うしやまたかなん

左京大夫顕輔

恋ともいはそれ世よゝゝへてくちやまてかむ萩の坊

本

高砂乃おのへの松に吹風乃おとにのミやハきゝわたるへき

待賢門院堀河

おもひそめ世哥よてゝ波まやゝ流まなき人よとゝまハ

上西門院兵衛

いは間山の志ゝ水かき絶てりけすめのかはとをしかむ

権中納言俊忠家の哥合ふこひのうたとてよめる

藤原基俊

見てとりてもふいもてふゝや世思草志のふとなそと志ゝ世そ

しかは

人よつかはしける

藤原長能

恋ふといはそ恋ふ蒔し松の種千世と契りんハまハねさせよ

うらやましいかなる人のこゝにはなかされて見れ
人のいりのいふをきゝてなむありける
はなるゝせぬ女につかはしける

前大納言公任

おもふらむまゝならぬ世の人ごとやわかことの葉をしらぬなる
あかのふる日しのひたる人につかはしける

堀河右大臣

人しれぬ物思ふ比の袖これは雨も涙もわかまさりけり
権中納言ありしかはあかぬ涙そなかされる
しのふ恋といふこゝろをよみ侍りける

源俊頼朝臣

あふことはたれともしらすとおもひけんや聖への恋めん
こひのことゝそよめる

源明賢朝臣

歎きさへあまりしもせきあへつゝこのよをしはいつはれとまさり
百首歌よみ侍りける時恋のこゝろをよみ
侍りける

太おほいまうちきみ君

人しれぬ木の葉の下のむもれ水思ふこゝろをたれかしるさや
思ひしらす

久我内大臣

恋しともいはぬにもるゝ袂かなこゝろをしるはなみたなりけり

從三位頼政

さへとをいそきてきのふの山の花もちりにこそなれ

寂然法師

みちのくの思ひしらすもしのふ山色にはいてそこゝろなりけり

藤原清輔朝臣

なにはめのすくも焼火のしたこかれうへはつれなき我身なりけり

歌合し侍りける時しのふる恋の心をよめる

刑部卿頼輔

恋しなは世のはかなさにいひなしてなき跡まても人にしらすな

顕昭法師

人言は波の川のせ上やいそのかみのふるきになして

あひしらす

よみ人しらす

いかにせむみかきかはらにつむせりのねにのみなけとしる人のなき

恋の百首歌よみ侍りける時によめる

恋といふ心をよめる　賀茂重保

道もなき人の心や逢坂の関路へたつる霞なるらん

恋のうたとてよめる

藤原清輔朝臣

波間よりさゝれの島となるとても人にはみえぬみなれそ知れ

二條院の御時に人々に恋のことを百首歌めして

さりける時よめる　源通能朝臣
わか恋は花咲こそす秋風の音まされ月はみちても
よるのねりとなる山ふところもかきると
きかせよあやしきわかれの待けきはかなくて
つかしきる　仁昭法師
世をいとふちしと忘ひしよるちちにあやなく人を恋するかな
恋しらず　花園左大臣
あまりにはおもひ物思ひかへてん人をみるめにはあやなくも
太政大臣
みるめたに一まちに君をとふ恋ちにまとふ秋やなかるらむ

前中納言伊房
君こふる身はおほそらにおもひねはさも月日とおもはぬ道かな
こさはいの恋にしめてまよひけり女房
わしくもとさら世はてよみくあま
ひけり　二条院御製
このねに通ひそめにし松吹風よおもひねあかれと
百首歌よみ侍ける時こひのうた
式子内親王
もろ通や枕さへあかぬねよりのふきまふ夢通路
こひのうたとてよみ侍ける

右のおほいまうちきみ

はるさふる波とおもへは今まても心ちにほとふ衣せよ
あいしらす

刑部卿頼輔

なかくへはしらさるとかるやと定めなき世をたのみそ

源有房

いにしへやまひさかへさ波のは神のしるしみるとあれ

源師光

ぬしさとうき身なりとてはるみいつまてはこ鏡

藤原惟親

あめのめくやうやいかにかあめの恵にもとむ緑そへり

覚智法師

こゝろにも出しと思へともいまそいまさら
夏よりて恋まはるとふる心ともかな

賀茂重保

今まても心ふかふる草花はさそそ冬よいそはまし
しらす

津守国光

日かけ今はしけさかまはる思草あかぬとの葉風をならん

大中臣清文

杉つまとし秋よしつまぬ玉かは恋のなかめ風吹かなくらむ

源季貞

人しれすおもひそめてし心こそいまは涙のいろとなりけれ

祐盛法師

色みえぬ心の程をしらすれは袂をそむる涙なりけり

大中臣定雅

わかとこはしのふれおくのまゝにけ涙露けきとこもしらなん（のふさき）

祝部成仲

君こふる涙時雨とふりぬれはしのふの山も色つきにけり

二條院讃岐

いかにせん思ひの山の下紅葉しくるゝまゝに色のまさるを

賀茂重延

よしさらは袖は時雨のそらくもれ人は冬のはしめならねと

摂政右大臣の時の百首の歌の中に忍恋の心をよめる

従三位頼政

あさましやをとはつる袖の下くゝる涙の色を人やとかめん

皇嘉門院別當

しのひねの袂は色に出にけり心にも似ぬわかなみたかな

かれかれなりけるをうらみて侍けれはつかはしける

右兵衛督隆房

おなしくはかさねてしほれぬれ衣さてもかはかぬ袖とならは（しをと）

返し　よみ人しらす

なかまてとおもひこゝろやすかりし人はこのたひもしのふる身まかる

恋のうたとてよみ侍ける　大納言宗家

人めのみしのふにせきかねて袖にかゝるは浪なりけり

右京大夫季能

つれなさにいはてたえなむと思ふなるあひみぬさきの別れかな

法眼実快

よそ人はとかめもそする思ふ君にそみせやと思ふ袖の色を

藤原仲経

しのふあくそ袖にもとゝめかねつゝいとゝみむとてはやしや

摂政右大臣の家の百首歌合に恋の歌
とてよめる　藤原季経朝臣

思ひ出つそのかみにこそあり逢坂のつきつか

あるし家に百首歌よみ侍ける時初恋の心
をよみ侍ける　皇太后宮大夫俊成

とりすかるふかすそ野の下露やいるより袖はかくしほるらん

忍恋

いかにせんむろのやしまにやともかな恋のけふりを
空にまかへん

千載和歌集巻第十二

恋歌二

堀河院の御時百首歌たてまつりける時恋の
心をよみ侍りける　大納言公実

こひあまり今はこゝろやみなせ川むせひそなかに袖はおほるゝと

題不知　花園左大臣

つれなくも今は心とはなれなむ身のはてなきにこそしのひあまれ

二条太皇太后宮大弐

恋しなん人はいかにかつれなからん我涙をもしらせてしかな

白河院三条殿によませ侍りける御こと
も恋の歌よみ侍りけるによめる

前中納言雅兼

かつきぬる涙と人をもみるからにしのふる袖よりこちそする

権中納言俊忠家にて恋の十首歌よみ
侍りける時いのるともあはぬ恋といへる心をよめる

源俊頼朝臣

うかりける人をはつせの山おろしよはけしかれとはいのらぬものを

おなし十首のうちにふかくしのふる恋といへるこゝろ
をよめる

修理大夫顕季

うきてくる波のしたにも神もこそうけむしめ縄の絶しとそ思ふ

旅外宿恋　藤原経仲朝臣

むすひとめしらぬの里の草枕とまりてやまぬ猿もあやな

来不留恋　権中納言俊忠

こひてもひとをなくさの沖つ波よせてはやかて立かへるや
せはつらかりけり

後徳大寺左大臣

いそはきつれなき人に身をそへて恋ころされむとおもひそめけん

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍ける時
家の歌合に恋のこゝろをよめる

源雅光

玉藻かるのしまか浦のあさなきもいとゝかはく袖はあまのたく

藤原重基

逢ことを其年月とちきらねは命や恋のかきりなるらん

中院右大臣中将に侍ける時歌合し侍る
に恋の歌とてよめる　藤原宗兼朝臣

恋わたる涙の川に身をなけむこの世ならてもあふせはやと
百首歌たてまつりける時恋の歌とてよめる

前参議親隆

みちのくのをとつの橋にもあらなくにふみゝても人にかよはしか

逢日増恋といへる心をよませ給ひける

院御製

恋しらむ君か涙よそにこそまさはわか袖はあふ道かたきに
乾しらす

右大臣

わきもこか涙の露と散るからにさなへ苅萱の袖にこそ宿れ

権大納言実国

志かすかに世にありのおもひやるとしらぬなりにしみのうきめよりほと

権大納言實家

よしさらは逢とみつるにかなしさもさむらうつゝと夢をなは

右衛門督頼實

いかはかり思ふとしりて流しける我涙の色とみせはや

俊恵法師

恋しなん命を誰にゆつりおきてつれなき人のはてを見せまし

従二位頼政

せきかぬる涙の川のはやき瀬はあふよりほかのしからみそなき

藤原盛方

わか恋は年ふるかひもなかりけりうら山しきは宇治の橋守

道因法師

なからへて猶しなん別の道こそは命にかへて逢ふとこそきけ

賀茂重保

錦木の千つかにたりぬかひありせは猶こりす逢ま遠き
百夜まてまつりけり時恋の奇よそてよか

前参議教長

いかゝり恋ちかはとさゝねされハ年ハゆきとともにへよなん
ともしくりのやかりけるくまよりのあさかハ
なかぬまと人のつけゝるかれハよめる

三のみこの家越後

なまてはつらきほとにハあはれとの数ならぬ
大納言忠家みちかねよ侍りける時かれかる
ことありけるとおもしくは[illegible]となさるや
やゝひつらし侍るかれハよそにほつゝけゝる

法性寺入道前太政大臣

逢らんとさとひかよりそあの立まむ名ひたれかさみなと
後三条の内大臣家よ歌合し侍りけると
恋の歌とてよめる　道因法師
恋しなむ身ハ惜からすあふことにかへんとおもひけるそ
贈太政大臣長実の八条家にてこひの心を
よめる　左京大夫顕輔
今ハたゝおもひしむまてかくてとも命とならんとのちをそ
あはしらす　平忠盛朝臣
一夜とふひくりかゆかりかつまもなき人のつらきほと
藤原道経

忘れじなちぬのますらをならばこそ生田の川に身をやなげまし

寂顕法師

命をばおもふまゝにと思ひしを忘れぬとこそ思はせてしれ

源師光

忘れじと又たのめしも思ひやる心のまゝにたのまざるらん

道因法師

あふ事をねぬ恋なくはかなみゆかしそつらさことぞ思ひしる

顕昭法師

つれなさはいつまでおもひをたえぬまはこの世ひとつの歎なりけり

源慶法師

うたゝねの夢にあひそめしよりは人をたのめぬまでぞは

俊恵法師

おもひねと枕ならりやおもふらん涙絶えぬ契りさきと

しのぶこひの心をよみ侍ける

二条院内侍参河

衣手におつる涙の色ならば露とも人にいはましものを

殷富門院大輔

思ふともしのぶはいとぞふりにしを数ならぬ身はなげきぞかなり

右大臣に侍りけるとき家に歌合し侍ける

時こひの心をとてよみ侍ける

わかるゝ人のなかまにやおもひねはさふに恋わたるらん

按察前太政大臣

寄郷恋といへる心をよめる

左衛門督家通

逢ことをさりともかのゝたのむ哉置露をとなかの
ちのひて人まに侍りの身のほどさしつ絶せぬ人
よはかりけり

二条院御製

なからへは見るもつらさぞ我まてとおもひしちや
百年の命のなからふこひのころもと

式子内親王

袖の色は人のとふまて成もせよふかき思ひを君たのまは

契暮秋恋といへる心をよみ侍ける

左近中将良経

妹はかし契は末を秋とふかく待くれの空そつれなき
こひのうらみとてよめる

藤原成家朝臣

恋そめし忘るゝ空の浮雲はくもるとも見えて袖ぬらしけり

忍偶書恋といへる心をよめる

藤原家實　中納言資實之

秘くゝ人さへやましとともめしか筆にまかる涙にかはる墨やこれ

たいしらす　　藤原家隆

今はとも契てこれは過ぬらんさひましなる昔の空

よみ人しらす

契りをそのちも見に身をとへく待の世にはおもひ出
おかしらみく月のあつけり来人なそひ
なかとかのはにそて心かくるはしひて待つ

人あやまちはいひけれは殺盗の法尾法

雅敢よはくもはふらん雲まよりみし月影はひかりなしと

悲為後世婦といふ心をよめる

藤原家基

こゑやして恋ちふかきにもおもほへす世とはそてくぬ宮まて
外なる云実とひとやうらんとよめる

西住法師

手枕のへはこころへあさねかなしては老へ人はしほ

題しらす

従三位よりまさ

わか袖のしほれみちもつ涙かな深きをぬれは

法印静賢

しからて袖のひるまはありやともなにそ此涙のあまには

俊恵法師

しひさや葉とはいせの契りてさむる別をあけくれとに

藤原隆信朝臣

我ゆへの涙とこれをよそにみはあはれなるへき袖の色哉

賀茂政平

あふことのかたきはいつれもおなし人のなやいかさまならん

源光行

恋しなむ海のそこやもとより河なかさゝなれしてなけかんとすらん

寄石恋といふことをよめる

二条院のさぬき

我袖は志ほひにみえぬおきの石の人こそ志らねかはく間そなき

恋しらす

民部卿成範

うきなからあけさは何かむくひそと志らぬ人をおもふほとね

太宰大弐重家

恋しなむとそおもひなかれて河をせきわひよそにさきぬる

刑部卿範兼

いともなつかしかる川の世にはおもひぬれても消へなんとそ

石清水の哥合とて人々よみ侍けるに

寄松恋といふ心をよめる

権中納言経房

ときはなるいなはしの年をへていつまてもしらぬおもふ哉

恋の哥とてよめる

寂蓮法師

こひねの暮たみて明ぬまはおもそとも此暮こそつれ

俊恵法師

夜もすから物思ふ比は明やらぬ閨のひまさへつれなかりけり
いつはりに思ひなりて袖と錦露よりも袖とたのまるゝ

菅原是忠

恋ゆへは浮身をいとはぬ人そかし逢さ我よそになし逢見せと

藤原親盛

こひせしとめられぬ恋にみを身え成りゆふくれの空

静縁法師

ありつゝ待らさん心をとらるやと絶えかねのはおちよとを

むかしはしなくてゆ手ままにけり人よつふ
しけり

大江維順女

こゝろみてきかんはさてもあちらはりしからは忘けん

暁風催恋

藤原成家朝臣

秋くらはつまとふれ人と恋風露にまよへ秋の夕世

題不知

源師光

恋しさをいつはゝ人さむしへとも身を数ならす人はつれなき
なんなのりしにつらりけり

權大納言實國

忘るゝハ我ゆへとこに思ハねよはつらつまらきんなりとも

左衛門督家通

乱こふにいはし世をせし先の世よ逢まてこそは契
思ひあかしゝ色まハ出さりけつなんかれまて
くみとゝまてそのうへにさつきてつれ
しけり

藤原公衡朝臣

ます鏡ぬもとらす掬ぬしハ清水とゝも兼ておほれけりや

法住寺殿の殿上歌合に旅宿遠恋と
いふ心をよめる

権中納言通親

いまはたゞ遠きたのめをもなりさねて思ひあまるあつまよふつき

藤原盛方朝臣

よ海川のあさゝにそ逢瀬ゝなると片さふらん

皇太后宮大夫俊成

思ひきやしちのはしかきゝつめて百夜もおなしまろねせんとは

千載和歌集巻第十三

恋歌三

題しらす　　藤原實方朝臣

契しにあらぬつらさもあふことのなきにはえこそうらみさ
りけれ

しらさりし思ひをそしる人すくなく忘られし秋をなけくとも

藤原長能

涙のみなく成ぬる人の玉章をとられし思ひにことともせし
やかてふかみよるもあかて別れにし秋をかたみの涙なりけり

ふむつき七日のよ大納言朝光のもとにいひつかはし
ける

とまりゐてころおもはさりに人のいひ侍けるに
つかはしける　　小大君

七夕にかしつと思ひしあふことをそれもよそなる名のたちにける

むすめともの皇太后宮にまゐりて侍けるに
弁乃めのとのなからひそめたると聞て
あからさまにとひさしよせくるのこころにかはさ
侍けれ　　宇治前太政大臣

うらめしやむすほれたる下ひもをはてもやなかにのこさらん

返し　　弁乃めのと

下ひもは人のこころにとかるれはつらきところもむすほれかん

ほりかはの院乃御時百首哥たてまつりける時
恋の心をよめる　大納言公実
ひとりぬる我まてしりぬ池水のつゝみのかみにかゝふるを
中納言師時
恋をのゝ志つ乃をたまきくまれにきはおそくゐふらゑひ参り
源としよりの朝臣
あさてわかつまゝとめれや遊志さ思ひてもあまたなる
中院のみくしおろしはへりてのちに中将よ侍り
時哥合し侍けるによめる
修理大夫あきすゑ

秋とりふゆくころもなきさんふらん恋はみちのくまゝに揃そこ
あひかたこひのこゝろをよめる
僧都覚雅
藤家源のかれにけるはかたらひそかゝるまかれ
堀河院乃御時艶書れうとてかへ乃そのこと
をよませ給ひて歌よむ女房かもと
につかはしけるを大納言公実はやまとけの君
母よりかくしけるを又内侍もつかはりと
きてそのゝちあちをかへりて侍りれいつれ
しけり　大納言きむさね

こゝろさしの末葉をいのりぬるかな世の君をそふらさらなむ

中納言に侍りける時歌合せし侍りけるに恋の歌

とてよめる　　権中納言俊忠

我恋はおほみかりにさされつゝ時ありてなき草

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りけるとき

の歌合に恋の心をしのふとおもふ心をよめる

藤原時昌

なとかくはみまくほしきへとさて恋ふる時はおもはぬ

思ひしらす　　法性寺入道太政大臣

冬の日をきえよりなかくおもすりのは恋つくしての後の心ちせり

ふる井のほとり皇后宮にしめてまゐらせ

まゐりけるのち人のかたにつかはしける

院御製

よろつよと契そめつる松がえにかへしての雪そ久しき

たのもしきとしもひてそしめそのの

侍ける人によみつかはしける

まふとかりて雪にけるつくる

しける

きくとふかしさふりのはなは我色さそそ

花そのたゝ大臣につかはしける

待賢門院加賀

かねてより思ひしことそ伏柴のこるはかりなる歎きせんとは(ふし)

法住寺とのにて五月の法花経のときをの
こともうたよみ侍けるに契後恋といふ心を
よみ侍ける　皇太后宮大夫俊成

たのめこし野への道芝夏ふかしいつくなるらん鵙の草くき

百首歌たてまつりける時恋の心をよ
める　前参議教長

恋しさはあふをかきりとききしかとさてしもいとゝ思ひ添ひけり(ける)

左京大夫顕輔

よそにしてくりとしき人はそゝしや袖のしつくとそ思さ(か)(か)

待賢門院の堀河

なかゝらむ心もしらす黒髪のみたれてけさは物をこそ思へ(こそ)

上西門院兵衛

よるの間も待よんやなくさむとはまさしくとのみあるら(面)

待賢門院のわさ

そのまゝ末なそなましてむまと昔のまゝなれはも(みそ)(か)

坂郎の恋れんを読る　従三位頼政

人はいさあかぬ夜とこにとゝめつるわか心こそ我をまつらん(め)

しのひたるところにまかりてあつきて九月

よみておくりてつかはしける

権中納言通親

忍入道前関白の月かれはしにしてこころを
摂政右大臣の時家歌合に旅宿によりあふ恋
といふ心をよめる　皇嘉門院別当

なにはえのあしのかりねのひとよゆゑみをつくしてや恋わたるへき（さ）

はしめてあふこひの心をよめる

藤原公衡朝臣

恋しとておもふ逢さを待しよの袖は涙にくちそはてけり

藤原隆信朝臣

忘れやはおもはしはてさは誰かうらみけん人しらすや（さ）

夏中契恋といふ心をよめる

参議経家

まちこそね覚めもこひみれとも逢ことのなきかせは
中納言くにさねの心をしてよめるなかち
よみしける

前斎院新肥後

あまやのはさぬれつらも我かこふをはぬれて恋ぬ

寄枕恋といふ心をよみ侍りける

久我内大臣

たのめしも枕は恋をしりぬらん涙くもらぬよはなかりけれは

夜のこひのこゝろをよめる

前中納言雅頼

恋しさハよるをなく蝉とわか身の物とやハみる

題不知

右大臣

思ひきるきて涙を人にゆくしつましらうや移るものはの袖

百首哥たてまつりける時恋の哥とて
よめる

前参議親隆

恋わひて世にのおまの袖にふるとも我ならひまハおりとそ

哥合し侍けるときよめる

藤原清輔朝臣

しのひそめて袂をしほりし涙よりまたは色そへてそ見ゆる

顕昭法師

よしさらハ涙よ色ハかはるとも人めを忍のふかさにそ
見しらす

道因法師

思ひ侘さても命はあるものをうきにたへぬは涙なりけり

藤原仲実朝臣備中守に侍りける
ともなくてくたりきとそいふすなりては
月をみくらを待る　遊女戸々

数ならぬ身をも心のありかほにひとりも月をなかめつるかな

顕白中恋といへる心をよめる

中原清重

涙やはそてにほかなる衣袖のいろかはるまてたのめさりせは

鳥羽院の御ときよみ人/\よみ侍りける時よ
よりてよめる

前参成通

枯はつる小篠かふしをおふすまもふかゝりまさる峯の嵐か

寄催馬楽恋といへる心をよめる

藤原伊経

分ゆくを篠か露のしけきにはおふみちにさへおもふ袖かな

あひみぬ恋といへる心をよめる

よみ人しらす

枕さへ浮ぬる涙の筆枕つゆもしとゝ人のおもかけ

月前にひといへるこゝろを

涙ともおもはさりける袖のうへにあやなく月のやとりぬるかな

権池人恋といへる心をよみ侍ける

内大臣

しのひ今日今は我とやなみのしほとひきも人さへしきりきる

左近中将良経

しのひてもいてはまたき人さ見えしははるか人よりまさり思ひてくらふと侍りけるときよみける

侍たれはつらき左兵衛督隆房

いつくより吹くる風のちらしけん誰もおもひのほかの名はたつ

散しらす　　従三位頼政

こひしさは夏にみゆやとさくらへすすむかたへ袖をぬらしつ　　源師光

くりかへしくやしき袖は涙をも思ひよりきむ志川のなかれ　　藤原隆親

いとかくて身をとしとてやうきは我とこかれて恋にそふらん　　源光行

あふさかはいとそくやしきつらむくものおもひのたねは　　皇太后宮若水

我ふかき涙は袖も朽てぬかるるやへたてもみえねき　　皇嘉門院尾張

命こそ夏のふすまもうらみしかなきよはそへとほしとも

契事待けるとこたへける女につかはしける　　右近中将忠良

なかなかや思ふままはおきてなれぬへにしけり夏草

夏中契恋といふことをよめる　　太皇太后宮小侍従

み夏さへねやそのかつみくるしきをたのめし人のまちてまたく

人はつらくて　　二条院御製

しらぬめやおつる瀧の糸よりも別れはさえてこそは
よみ人不知
返し
まさしぬ露のく袖と思ひやるとしへたれとの瀧よと
右大臣に侍りける時百首歌よませ侍りける時恋歌
の心をよみ侍りける　摂政前太政大臣
くりつる我恋をとわすれはなくはめぐる空の月
皇太后宮大夫俊成
しらざりき世々の契をとりかへしや御目見のさえ
夜半の月　そへて

千載和歌集巻第十四

恋歌四

題しらず　和泉式部

いかにしてよるの心をなぐさめむひるはながめにさてもくらしつ

これもみなさぞなむかしの契ぞと思ふものからあさましきかな

むかし御覧しける人のちかきわたりに

ありときこさせたまひてつかはしける

花山院御製

よそにては中々しくてもありなむとうちてそ袖はしほるかな

ひとしきさまにてこさらけむ人のなかとつまてら書

をくにつかはしける　小式部

思出て誰をか人のたつねましうきにたへたる命ならすは

大宰帥敦道のみこなくなりてのちよみ侍りける

きれもひそかにしのひて侍るにみて侍

けり

いつみしきふ

終とそもかゝりしそれはいつまてとおもひもかけぬ秋の中にも

あはれしらする

雁金は人わすれてやまぬ契をたのむかな

世のうきよりもうきかそありてつらかりける

藤原実方朝臣

竹の葉に玉ぬく露にあらねともまたよをこめておきにけるかな

堀河院の御時百首歌たてまつりけるとき恋の心を

よめる　藤原基俊

このまよりひれふる袖をよそにみていかゝはすへきまつらさよひめ

藤原仲実朝臣

ゆふされは猿の月にもまたそなき梅の花

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時の

歌よませて家の哥合にとてよめる

源雅光

吹風にちらぬ梢の花よりもとゝめかたきは波にそありける

遇不逢恋といふことをよみ侍ける

大納言成通

逢ことはひとよかきりの末の松こふるのみこそまたなかりけれ

権中納言俊忠中将に侍りける時家歌合し侍けるに

恋の歌とてよめる　伊豫三位 藤原敦兼卿母

恋侘てあはましとかりちなきくことよりかはらぬなみだなりけり

おなじ家に十首の歌よみ侍けるとき来

不留恋といふことをよみ侍ける

権中納言師時

立かへるなをなかりけるはま遠恋さてとひそめけん

うらめしく緑屋よわたるまことぞいのちなりけり

あえてのちはれしと見んとふることをよみ侍ける

藤原道経

別てかくこみなりきる玉章をなくさむかりかさもとて

久我内大臣

累恋従よ百こいそこあそてりけり時恋の

歌とてよめる

上西門院兵衛

我袖の涙やよそのみるかりみともとみつめなけれ

前参議親隆

あつまやのとやれ形乃思草こひをわたりとこきるにはに

皇太后宮大夫俊成

恋をのこゝろのうちにふかきあはれをしらぬいまはまたてん

待賢門院のあき

こひわびてすつる池よみ草おひてもえやらぬむかしをそ忍ふらん

藤原清輔朝臣

霧ふかきあさゆふの野にかれてなほやなからひとりそひとりかへるみちをと

逢ことのなかそらにさかえしらぬことをしるしをたにせむ

百年にすみ給けり時こひの歌とてよめる

顕昭法師

人ゆへはなかとやかくとおもひけんみをしやすからぬ心すなる

なにはなるあしのふし(?)人まくさこゆらむはなかし

しけり

平実重

わかこひはやまのはにかゝれなる末のかさちる橋のかけもなくらん

あはれしらす

人のうきを思ひいるふりをこほれてさきこもしのふらんそ

あさりけるとあひよせる女まつらけり

参議為通

契りしをまつとこふる契まつすまいつもしつまれ

しのひてりのいひけるかなしれるまよかし

なしかえんしられはつらき

従三位秀行

君よのこゝろ思ふもしまの水れんはあさからなくに

うへ乃花のことを老後窓といふらんとつかまつり

たるに禄を給けり　院御製

さひしさやまのつきをは忘るまて窓よ命のあらんかきりは

契しらす　藤原季通朝臣

なけき侘うき身そ年ふるもしき君か代へ積と思ふ

従三位よりまさ

あくまれぬとそかりとかきためて世をあへぬ拙御経

むつきのついたちはなのひろとまつらん

しけり　二條院御製

身をつくしても御こゝろそあふ君よのこゝろそなほしてまた

給返し　よみ人しらす

鷲はみへて都よ身をあの御子にはる我のこゝろあを

源氏の君のかりふかき窓といふところ

とよみ給けり

みをつかさ窓のゆかりに思ひつけて心よせけて思ふ世のこと

拙なるとよみはなりける世をやつしてなは深なゝけり

二条院の御時うへ内のことを百首の内

身をてまつりけり時思窓のこゝろをよめる

刑部卿範兼

月まつと人にはいひてなかむれはなくさめかたき夕暮の空

題しらす　藤原為忠

あすのやみりそめふハ清の里人へゆきとゝまらさりけり

円位法師

志らさりき雲ゐのよそにみし月の影を袂にやとすへしとは

宜仁法師

逢みしその秋の夜半もさめておきてなからへはかりかゝるまと

源仲綱

秋風のをと人へよりもつらきかな恋せよとてはなけかめとも

人はへ我身をはつして歳よまり恋はなかさくみなからのうきか

浦によりすむ恋としつらんとよめる

二條院内侍三河

ゆふくれそ秋風をふけはの浦風よたのめぬ波の音のきこそすれ

恋乃哥とてよめる　讃岐

一よとて秋風にこれさへ我にやそてとちりゆくつまのあまのか

百首哥よませ給ける時遇不逢恋といへる心を

よみ給ける　摂政前右大臣

なれへてとる心とみつつはおもはぬものをとゝもゆしらね

あつきさらぬいはつこにひとよめるとよみ給ける

前中納言雅頼

あふてのち遠ざかりすゝむとぞふともやらましものを

うりうこひをますとなる心をよめる

権中納言経房

稀りあにあはふしにかんけよ衣ぬ妻と成まけつ袖を

あけくれそをとりふなりけつなんあまつ

かふまそのこゝにみんとやまうのち須ゝ

しけり

右近中将忠良

こゝにあやおもふやいふあさまれもこれとはし叢を

歌合し侍りけるとき恋の歌とてよめる

俊恵法師

思ひわひ恋ちまてえうめら恨ハ恋もとゝ店を行

殷富門院大輔

みせばやなをじまのあまの袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず

浦河恋といへる心をよめる

従三位頼政

山しろのゝ里のさとひとをこそていくとひ従よ舟よ字ゑん

あひてひさしきこひといへる心をよめる

藤原隆信朝臣

人をまてもをひをあてし見葉丸路の行りも色やさあらん

寄會不絶戀　藤原家明朝臣

いつまてハなかれハみえぬ中川よ逢瀬のかすはなをそかはらん

攝政右大臣の時百首歌よませ侍ける時遇不逢恋といへる心をよめる　源仲綱

絶えにし後の中川瀬はみえてなかれわたるハ涙なりけり

初逢後思恋といへる心をよめる　二條院讃岐

昔よりたゝ恋しとそ思ひしを逢ひみて後ハまされることはり

こひのこゝろとてよめる　太皇太后宮小侍従

恋しさハねぬるのミこそなくさむれ思ひへたてゝ夢のかよひ来

道因法師

いせの海やいちしの浦のあまたにもかつかぬ袖ハぬれてやハみる

遇不逢恋といへる心をよめる　俊恵法師

さひしさやうき逢ふ事のまれにしもまちしにてあるよしもかは

夏夜恋といへる心を

かくしてハねられぬ夜の衣ハ夏なれとあかて人よりなりけり

こひのこゝろとてよみ侍ける　法印静賢

月あさとおもひしてやみなましあひみぬほとのうきならなくに 廿六

摂政右大臣の時家の歌合に恋の心をよみ侍る

皇太后宮大夫俊成

逢ことハ身をかへてとも待へきに世々をへたてんほとそかなしき

摂政家丹後

おもひねの夢になくさむ恋路ハあふとみてこそまたそまたるゝ

題しらす

民部卿成範

恋侘てうちぬる宵の夢にたにあふと人のみてはそわれめ

しのひてまかりける女のせうそこをおこせ侍りけるに

くく待けるをうしなひて侍りけるのちあまたゝひ柳子に

くりかへしくちをしくおもひてつかはしける

権大納言実家

まひねハ夢にても君にとこそなれさめなきよりの枕なりとも

返し

よみ人しらす

歎つゝハねよかしの月のみは枕をうとくなかめのみして

題しらす

右近中将忠良

これはみな思ひしそ夢よりあはれなる人といふに成らむ

権中納言通親

しゐてこそわくる枕の君よのこしてなくや

こひまし

千載和歌集巻第十五

恋哥五

題不知　　　　相模

うたゝねにはかなくさめし夢をたに此世に又ハみてややみなん

和泉式部

頼めしをあけハ袖ハ朽てもとらせぬめり物さしとそつきせぬ名

ともかくもいはゝなへてに成ぬへしねになきてこそみすへかりけれ

有明の月よりすひまにおきてそ見し人の名残とゝめし物を

紫式部

ありきかはうき世の常に思ひとも身をやゆくへしらさきそ猶

左大将朝光ちかくとふらはさりけるを
こせよりて世を絶けれハつかハしける

馬内侍

千とせやへんかりの杖の神をとまけ見えしをハ我とまして
くらひける人のひかけはつまさられけれ
つかハしける

大貳三位

うらみ命はかりハおしからて逢事なからぬ見えぬつきさるゝ
りとえりて待けるなとこゝろを人の世の中を
こゝてふるとつらしありけれハ待つて
返し

相模

かり人はとゝめりやせん筆まかせにおもしろき紙のこれを
かんなのふるき山もとにて雨かゝりしはいひて給ひし
をはつかりけり　大納言公信
山よりもふかき雨をも聞みはわかんまそ人はいふ人の
時よりのやけりか女のりにふみをつかはしける
きゝとよとおもしとそ思して給ふれはけふは
しけり　藤原經衡
いまは人もこえみちしらぬ粉抜は嫌ひたる人のさかなしみちなは
むかしあやりにいつかたとこのりふかむ雨ふると
てあちこちとひるよきことせく給ふれはむかしあはれは

つかはしける　赤染衛門
かふそこにあはさらなかまはしてさへ待人をこそみはは
中納言国信家の歌合に恋の心をよめる
藤原基俊
人心なにをたのみて水無瀬川せきのふるくひくちそなき
堀河院御時百首歌たてまつりけるとき
うらみの心をよめる　隆源法師
うらみてはこひしきまても人をおもはまし思ふてもそあるへけれ
花そのゝ大臣の家に侍りけるをまかせよ
中納言なともやけりけるかよりのちにまかりけるゝをれ

ゑまはなりにけれはおもひやるえよをしきされ
の山しろ風をなりけりのにとおもしとて
作りつけり　中院右のおほいまうち君
ゆくすゑや三とせをまちて出るのあらましき新枕せ
といひて待けるはおいなくのたとへにお
ほすなむありけるとかや
百首歌たてまつりし時恋の歌とて
よめる　待賢門院乃堀川
しらへ人と思もとも思さやは心にへたてなるらん
上西門院兵衛

うらみても契を思ふと待しきはいつまてしのことは
前参議親隆
忘るなといひし小枕のことならちりのつもりとこよさと
あいしらす　右大臣
まちなとこむよそのそ契ふこひしむをとかしと
右近中将忠良
思かね夕の雲もなかめもひとしれやまけきしれそへぬ絶と
左兵衛督隆房
恋しなはあやうきよ恋しにまちしふ人のつまにとまれ
太皇太后宮小侍従

見こふとこれあるま玉れさ秋かくいへなにつまにもさみしき

二條院のさぬき

見ふるものやとまもいつくこの世かきりとたのまほしき

殷富門院大輔

くるまゆきしこさとてもいける身の命をたのむにおもひかね

俊恵法師

見やはあらぬ身やはかはらぬおもかけにこのみなからむ

円位法師

物思へとかゝらぬ人もあるものをあはれなりける身の契かな

月前恋といふことをよめる

なけけとて月やは物を思はするかこちかほなるわか涙かな

寂蓮法師

久かたの月ゆへやは恋しきをなかむれはまつぬるゝそてかな

こひのうたとてよめる

祐盛法師

恋しともいはゝむかしこそなかりけれといとふは思ひそかし

藤原隆親

おもひあまりのあはれと歌ふめるさ月ゆへ人を恋ひけるかな

源有房

思ふとも恋ふとも人はしらせしとおもふはあはれとも

惟宗廣言

たのめこそ後の世まてと契けれ憂きにたへぬはいのちなりとも

源仲頼

ほとゝきすゆふくれことにまつ人はこゝろの秋のなかれさへ
蒲海路意とこそ人をとはめ

鴨長明

思ひあまりうちぬるよゐのまほろしも浪ちをわけてゆきかよひけり
あるえてひさしくなりゆく男に思ひそへまし
よりハなにこと心おもしなといひけまハつらき
まつ

左衛門前斎院中将

年暮とう秋月ハなにかふるしをつくつちをおなしけさ
百とせのめくりけるとき忘れすとてよませ給ひける

崇徳院御製

なかきよの鏡の影をおとろへぬ髪にしたかふのこゝろのうちかな

左京大夫顕輔

ちりかへれともおもしろかりしき浪のそらにうつしてみ

藤原季通朝臣

今はとてをはりの袖をぬらしてそこのまゝにおもひける

皇太后宮大夫俊成

わくら山のゆふくれ沼のうきねかはふかれ意ちかしまたかな

さゝ世にいとゝあはれになるぬ波つてそ友は秋をぬ梅こそ住なり

藤原清輔朝臣

あさゆふにみつゝめをそろへとさもあすもしらみはあきをぬすく　えさけ

上西門院兵衛

なにとなくそたのめしそらにみえむしひとえあつ暮ともなり　かり

虫声をとそよめる

殷富門院大輔

あさとほの空たのめそ初よかりしそそとはあき

あらしにす

後徳大臣

秋のみのけふいひしらぬ別かな月をもまたぬありあけの空

右近大将実房

忘らるゝ人ありとはにしきのまよと波のそこに月はしつむか

蒲閑路忘といふことをよめる

前中納言雅頼

ともしひのこゝろ霧よ衆をとふことは八声鳥に暮をそ恥へ　つる

九月つこもりに秋をしみ侍りけり

権中納言通親

よにしたかふ秋の別はよろこそへて人屋りあらぬ袖そぬれぬき

こひのうとくとてよみ侍りける

藤原経家朝臣

暮りゆくすかゝとの浜千鳥にみをぬ秋をそす

藤原定家

志らかり契し中もうらきけふは世よ人へとなりきけるかな

秋のよはたひとりねんとよめる

明照法師

物のよをおもふにとのかさりとはむかしの花の枕まで志る

十首を人のよみ侍ける時よめる

前参議のりなか

よしやさは君よんかはしてむ身を忘らるゝ人もこそあれ

暮恋故人といふ心をよみ侍ける

仁和寺後入道法親王覚性

なき人を思ひ出ることの忘れはてもこそやかれは

あつしらず

源俊頼朝臣

これをみよむかしもひとも忘れてし涙の露のおきそへ

ほかめかしきかみのほかにあれはこそ身をなかれにそ袖や

かわかぬ

馬内侍

篠の葉よ霜おく秋のさむけさにひとりはねなむ袖や

たふ

和泉式部

うらむへきかたりはおもひとなきものをなかれてもとよね

まれ

千載和歌集巻第十六

雑歌上

上東門院より六十賀おこなはせ給ひける時
よみ侍りける　　法成寺入道前太政大臣

かそへしる人なかりせは奥山の谷の松とや年をつまゝし

上東門院の内の御屏風に松ある所に
ふえふきさふらひける人あるところをよめる

大納言経信

笛竹のよふかきこゑそ聞ゆなる峯の松風ふきやそふらん

一條院乃御時皇后宮五節たてまつりけるに
とよあかりの日かしつき十二人わらはしもつかへ
まてあをすりをなんきせられたりける
其中にいつかりのひものとけたりけるをこれむすはむ
とてやといふをきゝて中将さねかたよ
りてつくろふとて

後拾遺定

あしひきの山井の水はこほれるを
いかなるひものとくるなるらん
といふをきゝてとみによみ侍りける

清少納言

うはこほりあはにむすへるひもなれはかさす日影にゆるふはかりを

十二月廿ふつかころさとにてなむありけるに
うらみありきつれとゝしかへりてはかまし
こぬやらんやといひくち侍けるにつかはしける

紫式部

誰かさとの春のたよりに鶯の霞にとつる宿をとふらん

藤原さねかたの朝臣みちのくにのかみになりてくたりにけるを
ふしてあまた月へりてかの國につかはしける

藤原道信朝臣

いかにねておきさゆくあさの露よりも中々みのおほつかなさ

二月はかり月あかき夜二条院にて人〻あまた
ゐあかして物かたりなとし侍けるに内侍周防よ
りふしてまくらをかなとしのひやかにいふをきゝ
て大納言忠家これをまくらにとてかひなを
みすのもとよりさし入て侍けれはよみ侍
ける

周防内侍

春の夜の夢はかりなる手枕にかひなくたゝん名こそおしけれ

大納言忠家

契ありて春の夜ふかき手枕をいかゝかひなき夢になすへき

一条院の御とき皇后宮に清少納言はしめ

て侍けるに三月廿日に二三日まかりて猿なとなき
侍るにかの家よりつかはしてまゐりける
皇后宮定子
いかにしてすきにしかたをすくしけむくらしわつらふきのふけふかな
御返し
清少納言
雲の上もくらしかねける春の日をところからともなかめつるかな
いふかしく思召ける人のむすめの女房の
つれ〳〵にゆかりあるまてをしのひてかへる今宵
見えりけるをかの月とくいそきふたれいつはり
きる
選子内親王
あひみむと思ひしことをたのみにていつまてかくてあるへかるらむ
選子内親王に侍ける右近か斎院よまいりて
つかはしくるまのうちとさしてまゐれ
日つかはしける
斎院中将
みそきをしかものかはなみ立かへりはやくみし世に袖はぬれきや
まつりの使にて神あちの宿所より斎院の女房
まつりける
藤原実方朝臣
ちはやふるいつきの宮の旅ねには葵そ草の枕なりける
弾正尹為尊のみこかくれ侍て後太宰帥
敦道のみこ花たちはなをつかはしていかゝみる

と云て侍れけるをつかはしける

和泉式部

かゝる世にまたふるものよりハ何ことさらやあるらし我やきえなん

上西門院かくれさせ給ひてのいつゝきとやけるをとらせなまて

うしなはさふらひし女房のもとにつかはしける　八条前太政大臣

此のまそてこほしはせぬみそ衣あらしはのちのそらそ寒き

賀茂のいつきにおりゐなましてのちちゝはさの

おくへ侍りけるまされ日御つかひみこになりて

ものいなふりやと侍りける人にはつかはしける

よみ侍りける

式子内親王

こゝろしや影みえうつるちりてさへこのはちるにつれてかくれに

右兵衛督にて侍りける時中院右大臣中納言にて

侍りけるに中将をとりこえて侍りけるをつきに中

てこりもぬ侍りけるときのゆきをとりをそへて

そへてつかはし侍ける　大宮前太政大臣

八重まてにまたしられぬ桜ちるらしとみるに猶そなかれける

返し　中院右大臣

なかなかそれもひとつへき桜ちる又ひきのこしたる時もあらむ

右大将兼長すゝめまかりて上卿にて侍りける

よりに夜更のりつかへ子清經か六位に侍けり
ましのふまうてけりさねとさせて侍けるとし
くみえけれハ父の白花經かりにさしをせ
をくりける　　左京大夫顕輔
このふ世思ふにちすり衣なへのかれかきりよる
上東門院に侍けるとさいそうの女
房のせうそこみつゝくに筆をとつかへり
まつてむといひて侍けれハ沙汰しまう
むしのなさ志させふ
露しけきくさのかりねの虫のねをおもひつけそやなん

二條院の御時たしかに御はらちと侍りけるこ
とにかくまいりて見かちのほうに侍るか
畢殿ハ中の院をさりかれハ給章ありけり
秋月乃あいてけりに女房なりとに侍りけ
従三位頼政
人しれぬおもひいちしのやまよりもあそひこそれてのこ月と
三条女御 琮子 遁世のゝちおほきさらに月を
してつらく侍りてそこらく侍ける
權中納言実經
秋をへて光をませる雲の上にかりにける月の影をとゝむるか

月ゐなしといはんと　仁和寺後入道法親王覚性

さらぬたにひとりみてたる月のかりいつつこころそまよはれ

月乃哥あまたよませ侍けるときよみ侍りける

法性寺入道前太政大臣

さゝ浪やくにつみかみのうらさひてふるき都に月ひとりすむ

あまの河空の月はひとりあかしやとるなみのいそなん

ゐはしらす　中務卿具平のみこ

ひとりねて月をみるらむ旅の夜はねさめそへとはひとのことさん

赤染衛門

独ねぬ人やこよひいかならむ旅寝まくらに月をみるかな

ゆくく

なかめつゝむかしも月はみしものをかくやは袖のひまなかるへき

いつゝきさふ

もろともにあはれなりける我きぬるなかしは秋の月とみせや

おりふしと侍けるころ月のいとくまなくおほえけれ

ける夜よみ侍りける　久我内大臣

うかりける世の中思ひそにしよともすみけるよはの月か

山家月といへる心をよめる

皇太后宮大夫俊成

すみ侘て身をかくすへき山里にあまりくまなき夜半の月かな

百首哥奉りける時月の哥とてよめる

前参議教長

なる海ゝ汀の月にあくがれて絶々波さへに露こまり

月乃哥十首よみ侍ける時よめる

藤原家基

はよするなみを井浦に寄せて忘しまゝ磯に月ぞ宿りぬ

俊恵法師

袖おもる(?)清瀧河にすむ月は光はふさるゝね光らをなり

賀茂成保

あまの原空をめぐりしさへ袖にそでをやとる月の影かな

顕昭法師

はるばるとおほまとはいとゝ嘆きりきり独そ月はみるへけれ

藤原清輔朝臣

今よりはふけゆくまでに月はみじそのこととなく涙おちけり

いしこゝろ修行に侍りけるにあまさかりけるか夏

ましてよさく月前述懐といふ心をよめる

登蓮法師

ゐるとふかん人にぬはきん月はむかしにかはるらん

ゑやことをゐれてとくとぞ侍りける事侍ける時月を

みてよみ侍ける

法印静賢

あかぬくふみをこの世よめくりこんたとうりすか山の端月
月乃影あまくしよみ侍りける時いさよひの月の
心をよめる　源仲正
そらなくとわかよはふけぬと知ていさよふ月を待まさるかな
見月慕旅人といふこころをよめる
源仲綱
ゆきわかれし人はやまちや過ぬらんつまて我も月をなかめん
百首歌奉りける時月の哥とてよめる
待賢門院堀河
おほかたはわか世ふけぬと思ふ身をさへ月にこころすむかな
従一位宗子やまひたりなりてひさしくまゐ
らて侍りて心ほそくさうしなと参せられて侍ける
につかはしける　近衛院御製
うき雲のかゝる程にはおほゐをもくれなきそそ在明の月
君のたか山そこに日ころこもりていて侍ける
あかつき月のおもしろく侍けるは
仁和寺後入道法親王 覚性
本のまりゐ在明の月みるらんすいひとゝや山のみねをそき
月乃歌とてよみ侍ける
仁和寺道性法親王

ともねせと思ひしぬとやあかし月さむき秋風に雲を

権中納言長方

あそひせん友そいとなかりけるやまにまよひて月か

殷富門院大輔百首よみ侍りける時月の

うたとてよめる　藤原定家

いかにせんそらさ世にふくすたの月も浪にやとり

影しらす　藤原家隆

山ふかき松の嵐を身にしめてたれかねさめに月をみるらん

八条院六条

まつ頼もいとしもそらにすまねは桂の山のあり明の月

法印實修

世をいとふ人の月をみてかやまのはにおもひいるらん

閑居月といふことをよめる

藤原隆親

住ひきし月のみすかはなれはたれをかとふ人をもとめる

寒夜月といふことをよめる

圓位法師

君さらぬ庭のこのはをふき分て月かけやとる

世をのかれてのちいつかのほりことをそへぬ

つもりけり

平實重

すみなれし宿をも出てあはれゆく月を見てこそ思ひいでよよ
旅郷月といふことをよめる
俊恵法師
旅にして井出のしがらみ草かりて月さへ今宵すみ馴にけるかな
水上月といふことをよめる
藤原家基
ほどこそはかけてもおなじ世ならねと思ひさだめよやどる月影
かもの社にて後書歌合に月をよめる
藤原親盛
なにとなくなれむつ袖のかはくまは月のやとれる露やかくらん

山家暁霧といふことをよめる
大江公景
志ばふくやよその霧に見えてあけぬる月を見つるかな
山家月といふことをよめる
静蓮法師
足引の山のおちこちよむとてもまさてやみつるわか宿の月
月照寒草といふことをよめる
紀康宗
かれとも小篠にやまにおく霜の下の萩の上葉をてらす月影
月照山水といふことをよめる
法眼長真

雨はれてたつ山ゑての水にやどる秋の月さへ草風にくもりそめけん

山端月といふことをよめる

藤原為忠朝臣

ふもとの霧吹むすふ木枯にさはへのかゝる山はの月

草屋月といふことをよめる

覚延法師

嵐にはゆやのあれふきさわきにけり枕にやどる露の月影
多りしらず

法印慈円

山ふかくなほ又人もたづねきて杉のしげみに月をみるかな

月影の入るかたにこそふく風に雨にやみぬる山の端のそら

摂政前太政大臣の家に百首歌よませ侍りける時月の歌あまたよめる

俊恵法師

この世にてむそぢはなれし秋の月しでの山ぢもおもがはりすな

月のうたとてよめる

円位法師

こむ世にはこゝろのうちにあらはさんあかでやみぬる月のひかりを

二条院の御時四代まで侍臣なりけることをおもひてよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

いかなればしつみはてにし年をへて雲ゐの月とゝまらん

堀河院の御時百首歌たてまつりける時述
懐の心をよめる　　藤原もとゝし
から国にしづみし人もわがごとくみよまであはぬ歎をやせし
僧都光覚維摩会の講師の請を申ける時
たびたびもれにければ法性寺入道前太政大臣
にうらみ申けるをしめぢが原のと侍りければ又
そのとしももれにければよみてつかはしける
契りおきしさせもが露を命にてあはれことしの秋もいぬめり
述懐とて百首歌よみ侍けるによめる
源としよりの朝臣
世中はありしにもあらず成ゆけば涙さへこそ色かはりけれ
述懐のこゝろをよめる　　覚審法師
まよひにしよそちは雲の峯なからきこゝろの思ひそなき
経因法師
ちゝろしらならひにけるもあへさこの世をさへも思ひしるらん
天王寺にまいりて侍けるになにはわたりにて
橋乃かたし中をとさしてよみ侍ける
源俊頼朝臣
朽もせぬをとふへはなからの橋のはなからの橋もぬはゐのこゑなり

なかしかれしはかりみくよなか

道命法師

あふともありゆめの世中にむかしなからのかはらぬ
ものはしとしろきそよなか

左円法師

きふみはあかし桜は江にて昔ありきとこさてまはれを
津守のくにもとも身まかりてのちよみけるにも
すまひけりけると有基まうてあつさ
ゆまそかりて侍るに人のこゝろをかりてみ
侍けるは松の下をとけりてかれつき侍ける

津守景基 国基六男

人心あさ沢なりとも住みれ松のおもしきかはかりさ侍り
よし野のあれをよみ侍ける

中納言俊忠

白雲にまかひやせまし吉野山おちくる滝の音せさりせは
河内の大覚寺にまかりてこれかれよみ侍
けるによみ侍ける　前大納言公任

在拾遺

滝の音はたえて久しく成ぬれと名こそなかれて猶きこえけれ

藤原長能

屏風にたきおちくるところをよめる

ねきはいちはねるはみちる岩の山よりおつる滝乃志ら玉

京極乃前太政大臣布ひき乃滝とみ侍けるに
よみ侍ける　六條右大臣顕房

みなかみ乃そらも白雲とみゆるかなたえまもなくしき布引乃滝

龍門寺にまうてて仙室にかきつけ侍ける　能因法師

あしかきのまとにてらす宿なれはふる人はみえねなりけり

たかし龍門乃心をよめる　藤原清輔朝臣

やま人の昔のあとをきてみれはむなしきゆかをはらふ谷風

布引滝をよめる　藤原良清

なきとめのことはいと数多くて見けりとたえぬ布引の滝

宝乃扉にまきとよめる　藤原顕方

後にもあつむるやまと乃嗣かはふつきせぬとひかるらん

堀河院の御時百首うたてまつりける

とれたりしれうことをよみ侍ける　大納言師頼

うつりきやまかつもとそね橋ゆへに我か岩橋岩ねよりなり

おもしろうへ乃とのことをもいとさまりてや

はるゝまつりせうにつり舟をとりてよみ侍り
ける

権中納言俊忠

いそなれてくらうけきも世の海は志つ世にかゝるあまの釣舟

百首哥たてまつりてよめる

修理大夫顕季

玉藻かるいらこかさきの岩ね松いく世までにか年のへぬらん

夏草をよめる

源俊頼朝臣

志かみくは野島かさきのさゆりはに波こす風のふかぬ日そなき

もろくの国にて哥合とて人くよみ侍りし
時海上眺望といふ心をよみ侍りける

権大納言実家

きふそは秋のくれ山のをちも見えてはるかの松のおきさに出ぬる

権中納言実宗

ちる雨くは波にかくれしまにみえて世は浪は雲かの梢そ絶

右衛門督頼實

あるくとたまつの沖を見わたせは雲ゐにまかふおきの釣舟

眺望のこゝろをよめる

円玄法師

難波かたしほちはるかにみわたせは霞にうかふ沖の釣舟

藤原重經

春霞しかのからさきこえゆけは浪のはなとそみえわけさり

わかのうらをよみ侍ける

祝部宿禰成仲

ゆくとしはなくことゝもにやへつらんなとかはりせぬ

まつのうら那

千載和歌集巻第十七

雑歌中

五十御賀すきて又のとし春鳥羽殿のさ

くらさかりなりけるを御らんしてよませ

給ける

鳥羽院御製

心あらは匂ひをそへよ桜花のちの春をはいつかみるへき

落花のこゝろをよみ侍ける

仁和寺後入道法親王覚性

ちる花をおしみとゝめて桜花世にあれとも心あらはや

僧都頼實身まかりてのち又のとし春桜を見て

院の花さかりなるをみてよみ侍ける

僧正尋範

宿も宿花もむかしに匂へともぬしなき色はさひしかりけり

かはらぬそのちかひして山の花みありさ
侍けるに園城寺にまかりけるとてよ
み侍ける

前中納言基長

いにしへはよそにのみ見し山桜花は我をといかにみるらん

遁世のち花の歌とてよめる

皇太后宮大夫俊成

雲の上の春こそさらに忘られね花は数にも思ひ出しと

いし山にまうでてたまひけるとをよそて
かへさひせきの清水にて御車とゝめて
このたひはかりやとおほしけるにや

東三条院

あまたたひゆきあふ坂の関水に今はかきりのかけそかなしき

山よりかへりて志かにこもり侍ける時
よみ侍ける

前大納言公任

今はとて入なむ後そなかなかに山ちをとふ人もあらまし

そのころあはれにまかりてよめる

うき世をは峯の霞やへたつらん猶山さとはすみよかりけり

なきことゝ絡けるかな

和泉式部

花さぬ苔の庭にもかくとぞ招かゝる

前大納言公任さむゝなくかあふとこころ

まこりまねけつ時つゆりけり

法性寺入道前太政大臣

玉拾遺雑春

苔の戸をとぢやはてつる鶯の声もまだせぬ春の暮かな

山でらにこもりて侍けるほとふりて心ぼそく

けるに人のまうしてこさくらかのみ侍ける

ついでによめる

道命法師

くてまつはあはれなる花は山も見にゐよと思ひ志る

深山のころ比ちさかまゐりてかけこ侍時

花ゆかりとてつかはしける

大江公資

年ごとの春の山ようべとも身は老もせぬ物をまだ

寄霞述懐のこゝろをよめる

源仲正

たふとかてや春ともなく霞に迷ひて世こそ霧かゝる世は

まとのされてみちまたかへのもとをそてよめる

円位法師

ちるとみてなき心や櫻花むかしにかはるしるしなるらん

花の命おしくよみ侍ける時

をしむともいのちのいそかれさん櫻そくきことふ我身に

佛には櫻の花をたてまつれ我のちの世を人とふらはゝ

世をそむきて後よしの山花をみて讀る

寂然法師

この春そおもひかへさむ櫻花むなしき色にそめし心を

題しらず

よの中を常なき物と思はすはいかてか花のちるにたへまし

こやこゝろありなきことさへけり又のとしの春

うれし花さかりにみえんためてみるもはなさて

またとしをまさりて侍りける

よみ人しらす

くりかへし世にはまよひみて春は櫻の枝にかへらん

花のさかりに法成寺にまいりて金堂の

のまへのちりけるをよみ侍ける

皇太后宮大夫俊成

ゆりはきり看と志しは櫻もちりぬる末をも歎かんよ

依花待客といふことをよめる

源定宗朝臣

山桜花をわすれしと思ふすゝ人を絶へさせまつのいかゝそ

無位法師かすゝめ侍りける百首の歌の中に花
の歌とてよめる　藤原定家

いたつらに風をも世をもうらみまし吉野の花もちらすは

花の歌とて読る　源季広

ゆくそふしぬるかりこむ世まてもみる身となる人とまる

家にはらくさくとうへくよみ侍ける

源師教朝臣

老の世にと宿小桜をと摘らて折てみよ花とまかせ

高倉院春宮と申御時権亮に侍りけると番

みくしけに侍りける賀茂の社の歌合
とて人々よみ侍りけるに述懐の歌とてよみ
侍りける　権中納言実守

位山花をまつこそ久しけれ春の都に年はへしかと

崇徳院の御時十五首の歌奉りける
時述懐の心をよみ侍りける

左京大夫顕輔

春日山松にたのみをかくるかな藤の末葉の数ならねとも
なやましく侍りけるによみ侍りける

前左衛門督公光

猶ふかや身のうきをはなちてうき世をいとひそめけるかなしさ

述懐の歌とてよめる

俊恵法師

数ならてとしへぬる身はいま更に世をうしとたに思はさりけり

道因法師

いつとても身のうきことはかはらねとむかしは老を歎やはせし

述懐歌よみ侍りける時白河院にまかりて

さけることを思ひてよめる

藤原家基 法名宗覚

いにしへを庭にもとめし月かけを住しを忍ふ白川の家

すみよしの社の歌合によめる

藤原盛方朝臣

あはれてふ人もなき身をうしとても我さへいかゝいとひはつへき

右大将實房中将に侍ける時十五首歌よ

ませ侍りけるに述懐の歌とてよめる

中原師尚

数ならぬ身をうき雲のはれぬかなさすかに家の風はふけとも

学問料申けるにとゝまりて次の年給りける時人の

とふらひ侍りけるによみてつかはしける

大江通能

おもひやれこゝろにあまるうきふしをのかれんとそおもふ
思しらす　藤原公重朝臣
世のうさをとおもひしらする人をみよかくてふるやの軒のしのふを
　菅原是忠
もゝ人をなくてもそこに捨ち心つよさもかひなきを
　二条院内侍参河
いかて我ひまゆく駒をひきとめて昔にかへるみちをたつねん
摂政右大臣の時の家の歌合に述懐歌とて
よめる　源師光
はかなくていまいくほとぬ程に身をとふてむまれぬ後の世をおもふか

修行しに伊勢になりけると聞て
前大僧正行尊かりにつかはしける
　源俊重
いかにせんいせの浜荻みたれゆくおりふす波のまによらは
あるかたの山さとにすみ侍ける比風をきゝ
りけるをよめる　源俊頼朝臣
枝の色をたえ山風にあられてともにそめしもみち葉
山田のいほにふりけるとてよめる
　橘盛長
冬山田のいほにいねかてぬ夜のおりはへてみつ河涼しや雲よはなれん

堀河院の御時百首哥たてまつりける時恋の心をよめる　二条太皇太后宮肥後

山里は楽おりく小高き垣人まれなりと空にしるかな

なか月のつこもりまてふるとかりてたの
りしけるかくおほえけるはひかしくところね
人のかりにつかはしける

藤原基俊

秋ちかきいつの野の虫はおほつかなやとや人のとはぬ
女かりにまかりて月あかく侍りけるにそしる人
きこしめしけるころかそへ侍りけるはよみ侍りける

藤原道信朝臣

この世にはすむへき程やつきぬらんよのつねならす物のかなしき
あいしらす　いそきたつふ

命たにいつはまふせん世ともしらぬ虫さへ秋はなきにこそなけ
むしさわしこゝふ

数ならて心よ身をはまかせねと身にしたかふは心なりけり
つれともせのなかゝなしきこゝえけるはさらに
かりにつかはしける　藤原兼房朝臣

あはれとも誰かはわれをおもふへきあはれと人をおもふにもとふ宿
前大納言経信かゝるにまゐみ侍りける風

えけしかりき来のあしたにつかはしける

中納言定頼

庭乃梅また風にはなちして花のかほしとおもひやまし

返し

前大納言公任

春に風の身にむとしは庭乃こずゑをとそこおもひやるる

前大納言公任入道し侍てなかなかにかく侍りける時

そのほうし法眼なとをたてまつり侍るとき

よみける

法成寺入道前太政大臣

世にいへはひけさやとりしかうくこそむかしの法の衣をそ

入道大納言公任

むかしとて見しまはこゝろは清の衣とならそこれかや

おなしこれ人よなむ侍りける

三条院くらゐさせおはしましてのち花の比のまへ

とすさけるに松のこゑ思ひはなかしはまかへく

ていきさところくへ開まあるにむつて姪のり

ころとみえてそのゝちは御供給り給けるにつ

りしける

弁乳母

青みそ松の梢はそれかしらむそみるとはしてけるれ

一品聡子内親王仁和寺にすみ給けるころ

みけひのおかとたこの見にみりにそそまて給ひれは

侍りける　輔仁乃親王

山里はけしきの色のかはらねば春さくらさへさびしかりけり

返し　聡子内親王

山さとのけしき宿のさみしさも覧れ乃のところぞまし

大納言実家許より三十六人の集をかきてたて

しつかはしけるに故大炊御門右大臣のさ

て侍ける所しるさせてなしてまいらせて

とありければ　太皇太后宮

このもとにかきあつめたることの葉を別れし秋のかたみとぞみる

返し　権大納言實家

ありしにもあらぬことの葉をみるからにひとよの袖のしほれさそなふ

高野にまうでて侍ける時山路にてよみ侍る

仁和寺二品法親王守覚

ながらへて世をのがるゝみちやいはほへ昔のあとさして行

述懐のこころをよみ侍ける

とひあのおもふれぬ身りあむいとひやまれぬかるさ世なるり

おもふ〇〇とや侍けるとき筆れいきやらふ

病にふしてよみ侍る

前大僧正覚忠

やどりするいまやみるこの苔筵いくよかねぬねそいつま旅

述懐の心とてよみ侍りける

大納言宗家

身をしれと思ひすて人やこれらくらくしらすさそはれてなにはの

右近中将忠良

そむかはやまことの道はしらすともうき世をいとふ心はかりを

二条太皇太后宮別当

松川によするを綾のさゝなみの色にゆく掛はわか身なりけり

百首歌中に述懐歌とてよめる

藤原定家

なのつし遅はあは世になかれても打むもと今よみてかさか

摂政家丹後

うしとてもいとひもそへぬ世中をなかなかにとひ思ひけん身はしらすす

清原備因

のかるへきさたまそゆにふ住むこれなり打とめぬ人の掛けれは

十月に重服になりて侍りける年のまつりのみ五節の乃春侍信ともとへいひつかはしけるとききてよめる

中納言長方

よろ人の花ゆく春をよそにみて我そぬれぬる椎柴の袖

題不知

藤原盛方

うれ世にもとまらさりける世中もはてはさくらの涙はおもひしりけり

とをくなかされ侍る時おもしろきまなつのもとを
しるかりてのちとさしてやこれひとゝを
かつらしけり　前右兵衛督惟方

このせにもしつむときけは涙川なかれしよりもぬれまさりけり

世をそむかんとおもひたちけるころよめる

宣仁法師

くもりなき月をはなれんとおもふにはこゝろにかゝる
こゝろのかゝるなりけるふかくしつみぬるかな
けつとくなかりて京よのほりては日よ
の国しるよまいりてよみ侍りける

平康頼

おもひやれしはしと思ふ旅たにもなほふるさとはこひしきものを

述懐乃うたよみ侍りけるとき

登蓮法師

かゝりける世をいとふともいてもまさるかりけるは
後の世に猶かゝりけりとおもへは

覚禅法師

おもひのあくるまてにのみはゝ菊の露とこそ
よのつねなるとおもひくしよと侍りける

権僧正永縁

後の世のことのみゆかしさむ今は程はいふとなきわれと
まうらふとなりて雲林院なる所に侍りて
まけるかふ人のもとへつかはしける
良暹法師
この世をは雲の林にかとてして煙とならむゆふへをそまつ
題しらす　よみ人不知
これよりのまよひも後は忘られて光遠は後なからこそまれ
むかしこひしき
いはしとも身をやはらくる風もなし忘られぬへき事ならなくに
述懐の百首歌よみ侍ける時ゆめの歌とて
よめる
皇太后宮大夫俊成
うき夢はなこりまてこそかなしけれ此世の後も猶やなけかむ
百首歌奉りける時無常の歌とてよめる
藤原季通朝臣
うつゝをもうつゝといかゝ定むへき夢にも夢をみぬそあやしき
いとひても猶をしまるゝ我身かなふたゝひくへき此世ならねは
上西門院兵衛
花や後はつきうつろふ程なさをおもひわひてもあるかな今さらに
花園左大臣家小大進
あはれなりねさむるこれ山のふもと草のいほりに世をおもひつゝめん

前大僧正覚忠うけたまはりおこなふことにまかせ
りて釈迦といふところにて金泥の法花経
かきたてまつりてこもり侍りて五十日ばかり
こもりて侍るに房覚のもとにまかりて
はべりけるにつかはしてとひをたりて侍ける

前大納言成通

ながらぬ命ぞいかにおしまるる君がみやこにかへるまで

返し

前大僧正覚忠

うき世をば捨てはてにし山なれど君がとふにやいでんとすらん

閑居水声といふ事をよみ侍ける

仁和寺二品法親王 守覚

岩そそくたまりの水をとせはこころとすまひてぞすむ

高野にまゐりて侍けるにおくの院にて静蓮
法師が庵室にはべりしとききまつにあはれ
にみえけれはいへりてつかはしける

権大納言実国

あまとよれ霧の月をしたふともこころはなほし草のいほ
秋ころ山王のかみてよろいの安楽の五僧
りしにまゐりけるに正法房が障子に
かきつけ侍ける

藤原公衡朝臣

なくさめにつみありとかたりねとんかりは墨染の袖思しらす

法印慈円

おほけなくうき世の民におほふかなわかたつ杣に墨染の袖

寂蓮法師

さひしさに浮世をかへて忍すはひとりきくへき松の風かは

殷富門院大輔

はくとこそいへは暁のねさめに小夢をみるそあはれ

西行法師

ゆくゑそてはくもやそなたいつせんねかえそ命なりけり

六条院宣旨

はちすはを見るにも道をこれそとてさとりをひらく人のあはれなるは中にも筆のあとをこそてまつ

二条太皇太后宮式部

峯はそてなきにのそみてたのむへくそこも嵐まはふか思しらす

宣仁法師

大かたのうき世をしのふ身をすてゝやくそくはいせてつれやまひありてかんかし山家のすまゐとてしくなりていかへのとひて侍けるをに

よめる　　大江公景

さりへ山君かやねよとも祈ても若けれは下よかへてへおなしまし

題しらす　　法眼慈覚

分侘ていとひし庭の蓬生もかれぬと思ふは哀なりけり

かもの社の歌合に述懐とてよめる　　寂蓮法師

世中はうさこそ今は嬉しけれ思ひしらすはいとはましやは

山てらにこもりて侍けるに房にさて侍りける

人のいつかいてんするとひ侍りけれはよみ

やりける　　覚俊上人

世をそむきさ草の庵にすみなからなほ世の中のこりのこ

源清雅九月許にまかりて山寺に侍りけるを

人のとひて侍りけるを世をそむきて侍ける

まことよみてつかはしける

源通清

とひやまし君まつ山に思ひ深き袖に露そ殊のきこしさ

題しらす　　兪従法師

暁の嵐にたくふかねのをとを心の底にこたへてそきく

そのかみ月をとくさへ遅いとひ出てうき世に深き山のは世

述懐の百首の歌よみ侍りける時鹿の歌とてよめる

皇太后宮大夫俊成

世中よ道こそなけれ思ひ入山のおくにも鹿そなくなる

妹こゝろやまてしかくよし侍りけり

藤原良清

とふ人も雨ふる庵のはかなさを山かつ卿井せしかや

君しらす

藤原宗隆

見る人もなきはほとゝきすとはれそさむる枕も昔ならせハ

太宰大貳重家入道月参りて坂山寺懐舊

といふ心をよめる　　藤原有家朝臣

初瀬山入相の鐘をきくたひに昔のとをくなるそかなしさ

春ころこゝろまうけつゝまつくふちつれたりの

墓所のあたり花のちりてきたりとそてむつ花

をおしみ侍るへるはしみてもおりいそくと

よみ侍りける　　権中納言通親

ちりつもる苔の下にも桜花おしむ心や猶のこるらん

此寺の中納言まさくり侍る小男よ侍りける

時さしめて昇殿ゆるしたるを侍りけるとゆ

きうく侍けるいよみて奏せたりを侍けり

入道前中納言雅兼

追たをうゝまへしと侍けむいまさ昔の世をくるとなる

還昇して侍ける人のもとにつかはしける

藤原季経卿

嬉しさはよその袂まで包むかな立帰りぬるあまの羽衣

今上の御時五節のころ侍従定家殿上のぞかれて侍けるを年もかへりにけるに三月のついたちころ院に申したまひける弁定長がもとに申侍ける

入道皇太后宮大夫俊成

あしたづの雲路まよひし年くれて霞をさへやへだてはつべき

このうたを奏し給ければいとゞしくあはれがらせおはしましてやがて還昇おほせくだされけるよしの返事をおほせつかはせとありければ御まへにてかゝれけるをみて侍りける

藤原定長朝臣

あしたづは霞をわけてかへるなり迷ひし雲路けふや晴るらん

このみちにおもむきしひとつの聖代にもしるすとなむときの人申侍ける

千載和歌集巻第十八

雑歌下　雑躰

短歌

堀河院の御時百首歌たてまつりける時
述懐のこころをよみ侍りける

源俊頼朝臣

りうみをも　せめいると　まさりけり　こふこころを
おかまと　ゆくことなく　せいれけく　そこゐをも
なつこゑは　よふよむかれ　わかうはの　おもひしすれは
あけまことを　いまそくる　なれさなれ　かくわかまの
うつりきて　もろ人をなき　なけきすと　なそれもちかふ
あさけとを　むなきとは　みやりかく　いふとりなき
かしさに　はそのまなけは　うつころも　をさふる袖を
くちそてぬ　なふとにそ　あれとも　おもひん人は
かふるなる　くちいその涙　くちいそて　いふともまち
ゆくふの　いつさ海そを　まきけむ　ことくのさき
ゆく世の　まをしき波　ちりなら　うきをまを
おもふさき　あさきをはよ　こやまむき　みえらかに
せきつきし　もろともそに　ここしかぬ　まさ月かなは
なりそそね　さすらふみの　ものあり　雲のうへまは

かゝへとも なかれともせぬ ひさかたの 月のかつらし
おもふ事は うきしか露 ほさぬらし むすほゝれの
ふせきに よもれ山に あくかれて こゝろみに
あちまちを うらみそめし かさこえも 露のたりとれ
ねさめして 憂世をさに となりもを 思ふ人く
わかれても ゆくへさらも 濡て袖て うらの露の
つまなかく 身に寄りしと そをかさねて いはのときに
なりかより いまゆく露は いとつまの ひとり袖をも
さためなき たとへはひとり なかしへて 志るをり
志く波とも 夢にゆめみる 心ちして 嵐ゆく雲

ことなりし ゆく水を見て ふるさとの 秋萩の露の
露かれて をしとたのむを まちすてて りうの志らへを
なりそめて 別ていそと 志りては 兼ふくたのを
志つむ心 くのそ露に おもひそく 粉らさきに
しほみのえ 志ずかにたまふ うちせらひ うつしゆを
うせそそく おもふをたのむ よの中に まことふくとも
思ひまの うき世の中に うさきは うきよを
あめしみは なかなかの松の つまてしか いまうつとも
かさつめて おもひ志れん 松くほとの 人のさかれ
たえのつく 志のふれかさ 身あはれとも まつなれとも

くもとられ おやにみな くせなまいハ これもはちらハ
みなしくり くち数つたに らりけく そまふつまそを
流のくにみ いてなのまみ いて見ひら おまゆさらハ
かりくへし くにそらぬ 月とうらむん

反歌

世中は恋月にそへて憂ありや思ひもつまじくなる風さそう
百首の歌めしけれ時よみませたまひけれ

崇徳院御製

志をさし波や 岩にせかるゝ てかりを さけいそろふ
ひさしこの おまつ秋ば そし帰りて みそりかまり

ひとりしハ いたのみれ やくもより おちりまうとそ
志ろ子すなら それより坂を りくくさの こゝめしちけく
ちりくは 風につきをは こさ雨まとだ ちらき嵐に
おのまうちハの なかれとそ はくなれ よりくろひとに
あつくへて 流るなさとハ そ海子なる 沈とも急まて
とゝめしせ 生ひなつても 流のくにれ なにハの浦の
なにとなく 舟のほするに これとくと 思ひなかれ
なきりかく よみ人こゝハ それがしの 身をとやせを
おりへとも 心中をおす うきつねはつ
おなし 百首の歌 よそまつりまうし時のなうく

待賢門院堀河

ときしらぬ 花のむらさき くちもせて むかしの雲の
こひしさに 袖のあやめを わけとめて かゝる月の
うけみくを 時雨よめて 袖のうへに 志くれ侍けり
あまころも 日数をわけて とふひとも なくにくてふ
清ともふえの これを給し 世なまよも 君ふころを
名をしらり 志をかなる 見すれなき 志宅にかけて
屋みのえれ まちる世の 身をくと ことゝ思ふたに
けうゆへさ とえへのけと たのむ小を なくさ沢乃
あくけしそ 紅葉乃の そのみよ 色ふかてそ

わかれかし みちれ下葉の ころ屋を あはれすまた
ゑみまはいまは おもしに 色くひは 志もしまかに
松とろへき くゆかめるに こゝさの あきそん
くれなく かれてのちを ありしとれ うきくもや
あらんとすらん

旋頭哥

志のつゝさの みよなりけりと 組その
おくまつりけつる 源俊頼朝臣
よし書 源仲正
東路の八重さくすゑをとはけさてもこゝろみよあゐ

なとてそあらてちらそもれ

返し　　源俊頼朝臣

かきそえしまためつき橋姫のみちはへてそあらねす
ことはらくむすふらむと

百首乃歌よみてまゐりける時よみひのもとを
よめる　　左京大夫顕輔

あつまちの野志まかさきの浜風にわかひもゆ
ひしいもかのさたかりけふ見ん

折句哥

二條院の御時こといふさきに五文字を

句のかみにおきてあふひのこゝろをよみ侍ける
源雅重朝臣

こゝろあそひいさよふゆふま立田河白波よする岸のかたと
なかむつらこの五文字をとりかへさきてあひの
ことよめる　　仁上法師

なふるかへ物そ思ふき秋風のおとにすむ夢のひのね　其六

物名

さくらをよめる　　和泉式部

よの程よりそあはれやさむるもみちかけきこえ　まてら
すきまかな　　中納言定頼

おとたえてとふへき人をむかしにはなかりしにあはれけさはゆきをかへん
かきのもと　大貳三位

榊葉はみちもせしと神さひて紅よみえまさる秋
嵐けたゝみ　二條太皇太后宮肥後

池もふりつゝみも月まてあれにしむへつまこふるおとさん
ろかや　源俊頼朝臣

わつかなる草のかり山志ろれてみの里にありとこそよ
浦こきのやとて

みつ山まれのやをそてにむ民ハとつむとも思し
かくれなき

よそにのみとけてなかめし我からかはかれてきたつし
とりなくき　刑部卿範輔母

秋の野にぬきとめぬ玉とみえつゝひとりは萩をみなかみ
百首乃歌たてまつりけるときのよみてはへりける
こさりしす　待賢門院堀河

雉はさかりもまた志なはさかりてゆきもあれみ山への里
君かの　僧都有慶

いかり山志ろしの松の年ふりてこの身やの神さひふかり
なさきのいそや　登蓮法師

花の枝くつはゆかしきれりけはふもいそかきのいとやかし

誹諧哥

花のちるによりふしてよみ侍りける

道命法師

あやしくも花のあたりにふせるかなをらはとかむる人やあるとて

うの花をよめる

源俊頼朝臣

卯花よそとしけしき浪をもかへそは岩とこえつつ

五月五日菖蒲をよめる

道因法師

けふかかる袂にねさせあやめ草うきは我身にありとしるへや

とりしとよめる

橘俊綱朝臣

とりしくるとねの山よりゆふかりにさきりみかりおほせ まつ

見る月のつこもりころにそかりけるなくを

きゝてよめる

江侍従

夏のよもかくいくらもあけてもあかしておりさらに虫の かな

鳴しらす

輔仁のみこ

秋風は秋のきしきをみてけるを時分ねをとなに花

萩乃露に玉ともゆかとておりけまてともにに

ゆもなかりけれはよめる

藤原為頼朝臣

あさ露をと日もあけてこれは給ほし萩乃つゆにかけやとまり

崇徳院に百首歌たてまつりける時秋の哥
とてよめる　花園左大臣家小大進
はなにおもひしさのゝ芝生れ物露とおもほしきまたまさとみつ
野花を見てたよりとそゝ心を読る
僧都範玄
をちかたとなかめしられ女郎花こゝろにもいはぬ花のけしきやとらん
九月十三夜によめる
賀茂政平
今の秋とはさやけき月影はとよみあかりてみるとかなり
隔我国他恋といふことをよめる

顕昭法師
杉ひさしはなやや風の河原こそ遠ふせぬ方わくれ
堀河院御時百首のうちにこひのうたとてよめる
藤原基俊
篠竹のおふせはさほの世中やおしやふしすきりなん
たひのこひ
源俊頼朝臣
こゝひくろ恋のやとにこれ縁そも身れくせうちや此ゆふろ
百首歌たてまつりける時恋の歌とて読る
待賢門院堀川
逢ことのなけきをみつりとほさをおもへし人のこりそかまて

六波羅蜜寺にて講の導師にて高座にのほ
りけるに誰ともなき女房のおしとつゝみて侍りけれは
よめる　良暹法師
人のおとゝむそそりねわくをかへせとこそいふ心
山てらにこもりて侍りけるに人のおこせたるを女
そのつかはし侍けれはいひつかはしける
宣仁法師
おそろしや木曽乃まろきの木橋ふみみるたひにおちぬへき
かくしのやうにこもりて侍けるにまきちらし
つてにはゆきてこそゆくえふきさなとしてあそひ
きりくなかりつるにこもりたるに人のもとを
とらせてそあるに人もはかりなきしけれは
人のそのちひさくまいりてこゝにとそれは
つかはしける　心覚法師
笛竹のこゝろとなりにしかはいのちもなからへて世をそ経
あつまれるこみまゐりけるにやゝけりして
よめる　道因法師
やかは橋わたりにきふとてゆかぬこゝにとしふるさみたれ
みんかをとゝくひ侍けるといふ事をわかゆき
ことなりおもひかえねといひけれはよめる

安性法師

はしとそはくかなとわきもてまうしらは月繁なりとも

阿弥陀乃小呪のりとこれみことにおきて十首よみ侍ける時おくにかき侍ける

源俊頼朝臣

うみなをまうりは海とのとかれにくるとよみちをたのもしさらや

山てらにまうしてあかりけるときうかふさかるなくとさしてよめる

赤染衛門

きくも又むまるゝひとそ吹つたふひとのおもひちつゝきあえん

題不知

空也上人

左拾遺他本仙慶法師歌ト

極楽ははるけきほどときゝしかどつとめていたる所なりけり

千載和歌集巻第十九

釋教哥

維摩経の十喩よこの身ハ水のあハのことし
といふこゝろをよみ侍ける

前大納言公任

こゝに消かしこにむすふ水のあハの浮世にめくる身にこそ有けれ

うき雲のことし

さためなき風ハうき雲によそへてもそてハはれそぬそあき

三身如来を観したてまつらんとよませたまひける

花山院御製

世中ハみな仏なりけりおしなへていつれの物とわくそはかなき

法花経の薬草喩品の心をよみ侍ける

僧都源信

おほそらの雨ハわきてもそゝかねとうるふ草木ハおのかしなゝ

菩提といふ寺に結縁の講しける時聴聞
によりてありけるに人のもとよりとくかへりね
といひたりけれはつかハしける

清少納言

もとめてもかゝる蓮の露をおきて浮世に又ハ帰るものかハ

後冷泉院の御時皇后宮にて一品経供養せ

らせける時寿量品のこゝろをよめる

藤原国房

月かけのつねにすむなる山のはをへたつる雲のなからましかは

寄月念極楽といふことをよみ侍ける

堀河入道左大臣

入月をみるとや人のおもふらん心をかけてにしにむかへは

天王寺にまいりて舎利をおかみてまつりてよみ侍りける

瞻西上人

薪つき煙もすみてさりにけむこれやなこりとみるそかなしき

月あけにまうして侍る精進のおりに金泥の法花経かきたてまつりて北山にをさめたてまつらんとてはいり侍りける時おもふことや侍りけむきりのふかゝりけしきをみて侍ける

藤原敦家朝臣

篠原めむその嶋と侍れのやまとてせ法のわり火
くて侍りて侍くれ北山にそてなん身侍る
つまふけるそのちゆうさとふくこみると
みいそ侍けるかなん

三十三所の観音おかみたてまつらんとて所

にまいり給ける時見ぬのくにゝてほのゝ
とみてよみ給ひける

前大僧正覚忠

世とてらす佛のしるしありけれはまた灯も消ぬなりけり

あるをみ觀音を見たてまつりて

見るまゝに涙そおつるかきりなき命にかはるすかたと思へは

提婆品の心をよめる　僧都覚雅

千とせまてむすひし露りそ我身にあるかは思ひを匹

陀羅尼品の受持法花名者福不可量何

況擁護具足受持者といふ事を誦して持

經者の結縁なりしやたまはりけむとよみ給

けり

前大僧正快修

うきつゝそなをたのみにかくるぬ法のむしろにみをとひかへ

阿弥陀の十二光佛の御名をよみ給ける

なかに智恵光佛のこゝろをよめる

源俊頼朝臣

俗人の心やみをもてらすなるやさしきひかりおかくらん

百首哥めしける時普門品の弘誓深如海

のこゝろをよませ給ひける

崇徳院御製

ちりひちをすてゝ乃海よたゝふ也露も身のまゝ数よ入らむ

おなし百首歌よれて華厳経のこゝろを

前参議教長

をろかなる三世乃仏とさとりけり我身ひとつよありと思へは

即身成仏のこゝろを

照月乃ひかりのふかきあきらかにやかてこの身よ光をそさす

法花経乃信解品乃心をよみ侍けり

大僧正覚忠

擣りてをいりそふる衣の声をきゝて出ぬしぬらむ

梅中ころ法入道法親王のやよこもりて

侍けるふをくりあそひけり

崇徳院御製

梅か香ハ花のもとゝそとうむとも三世乃仏の日やてらすらん

此返し

仁和寺法入道法親王覚性

てらすなる三世乃仏の日よ梅か香をもさやかに見え

百首歌乃中よ法文乃歌よ普賢経の唯此

彩王不相捨離といふ事を

式子内親王

底をひかりわたる此へもさそふ月の影とこそとけ

百首歌乃中よ歌よみ侍る時法文乃こゝろを

五智如来をよみ侍けるに平等性智の心を
よみ侍ける　　摂政前右大臣
人ことにかはるは夢のまよひにてさむれはおなし心なりけり
維摩経乃十喩此身如水中月といへる心
をよめる　　家隆朝臣
ましあはれこれはかりをさためなれは月やみにやとる月を
もえの山に叡岳学法不和のことにてまいり
て学法しけるに千日乃山こもりみち
なんとともちくもしつまれおもくとたむと
なけきてかはつふ山洞によりてまいりて侍りけ
頼みこしみをなりにけれは雲ふかき
わしのやま鷲園法師のゆかりにつらなりけり
法印慈円
いにしへ昔の我やたえなんと思ふを思ひけむ
返し　　寂然法師
忘るなよ釈迦の御法に昔われ三世の縁を
法花経の中に子品の因縁菩薩行のこゝろ
をよみ侍ける　　左近中将良経
ひとつのみちにさかへてまことや座をさらぬ人はみな
摂政前右大臣の家に百首歌よませ侍けるに

とき法文乃あまたなりしに般若経の心をよめる

藤原隆信朝臣

重行のむなしとおもふことの葉は三世乃仏の母とこそきけ

おなし百首中色即是空即是色の心をよめる

摂政家丹後

むなしきもむなしと捨ててさとれとや色のみちをもあらはしぬらん

法花経乃我於長夜修習空法の心をよめる

前中納言師仲

なかき夜もむなしき物としりぬれはやかてあけぬる心ちこそすれ

寿量品の心をよめる

登蓮法師

鷲の山月を入ぬとみる人はくらきにまよふこゝろなりけり

瞻西上人雲居乃極楽堂に堀河左大臣

まいりてうたよみけるによめる

神祇伯顕仲

いさきよき池にかけうつるひとたひもあまたのやをとおもふ我身を

大品経乃常啼菩薩の心をよめる

寂超法師

捨る身をいたつらはしむなしとおもふみ法ゆへすて

維摩経十喩之中此身如浮雲といへる心

とよめる

藤原資隆朝臣

見るほとは夢と夢とも志りなからなほはかなくもたのまるゝかな

登蓮法師

おしなへてまよふこゝろのはれやらぬうき世をは苔にすみける

高野にまいりてよみ侍ける

寂蓮法師

暁をたかのゝ山にまつほとや苔のしたにもありあけの月

煩悩即菩提の心をよめる

式子内親王家中将

思ひとく心ひとつになりぬれは氷も水もへたてさりけり

観音のちかひをたのみてよみ侍ける

前大納言時忠

たのもしなちかひは春にあらねとも枯にし枝も花そ咲ける

法花経の序品の心をよめる

藤原伊経

春毎になけきし物を法の庭ちるかうれしき花もありけり

授記品のこゝろをよめる

右京大夫季能

み草のさしけき雲りとみえしをはれても月まちえんこそすれ

法師品の漸見湿土泥決定知近水の心を詠る

皇太后宮大夫俊成

むかしの堀かねの井をあつねても嬉しくもわれくみつさかり

提婆品のこころをよめる

静昭法師

芹つむとむかしはつらき歎のやせにせとくらなとかわりけん

勧持品のこころをよめる

法橋泰覚

桜そてあやしくみたれなかされてその袖をいまはえこそ

藤原敦仲

うつみけりしきや空にみえつらんなかなかてて山を照せる月

神力品の如日月光明能除諸幽冥の心を

蓮上法師　俗名成実

日のひかり月の影とそてらしけるくらきこころのやみは晴れにて

勧発品のこころをよみ侍ける

皇太后宮大夫俊成

さらにまた花そふりしく鷲の山法のむしろの暮かたの空

満三七日已我当乗六牙白象乃心をよめる

中原有安

待出ていかに嬉しとおもふらん何かあまりし山の端の月

雷朝因法といふこころをよめる

中原清重

あさまつる花は法の場にふる雪は空より花のちるかとそみる

やましなてらの涅槃會のまうでに遮羅人
藏のむしとなりしをよみ侍ける

恵章法師

きさ月の雲かくれせんはるのあはれをとふか空にしらぬ
めり

涅槃經の如於鏡中見諸色像の心をよめる

俊秀法師

こゝろをもかゞみのそこにうつしみてやそそこゝろをすまし
火滅久不滅といふことをよめる

寂然法師

焼あふにしはしまよひけとりへいちの別はしらぬことそ
えん

阿彌陀經のこゝろをよめる

平康頼

鳥のねも波のをとにそかよふなる同しみ法をとけはなりけり
天王寺の御幸のとき古寺忠昔といふ心
をよめる

藤原定長朝臣

世をすくふ誓は昔かはらねとをしめるてきく時とならぬ
侍ける
天王寺にまいりて遺身舎利を礼してよみ
侍ける

天台座主明雲

つきぬるぬのりは釋迦の煙そとみえて候
さ
往生講の志されけるとき範兼のもとにて

よみ侍りける　律師永観

みな人をわたさむとおもふ心こそ極楽にゆく
しるへなりけれ

千載和歌集巻第二十

神祇哥

後一条院の御時はしめて春日行幸ありけるに一条院の御時の例を尋
しいくはをあまりしてよませ給ひける

上東門院

みかさ山さしてきにけりいそのかみふるきみゆきのあとを尋て

長元八年関白左大臣家哥合し侍けるのちた
方のさくらへよろこひよみ侍りてまつりて
うとうと侍けるに左の方にてよみ侍ける

大納言経輔

住吉の浪もしつかにせられはむへそみさひに立まさりけり

志のひて里熊野にまうてたまうて帰
侍りともおくれし風の音すれはへて人へ
言よみけるにつかはしける

後二条内大臣

ちはやふるかみふる神されはしるやまにゆきとあふてかな

百年乃ことめしける時神祇官にてさせ
たまへりきつ

崇徳院御製

みちのへ乃塵に光をやはらけて神も仏のなのるなりけり

藤原清輔朝臣

おなしくはこのよまてや榊葉をと三笠の山に祝ひそめけん

中納言家成住よしにまうてて歌よみ侍る
時よみ侍ける

大納言隆季

神代よりつたへる浦に宮居してへなん宮のあさり志すゑ

大納言辞申ていとつゝしみ侍ける時住吉にみゆれ
社の歌合とて人々よみ侍るに述
懐の歌とてよみ侍ける

みさのあたいまうしちきて

かさ重ハやとせへふたりおなしちとふさの下

そのち神感あるやうに夢想ありて大納
言になん還任し侍りけるとなむ

皇太后宮大夫俊成

いつしかにふりぬる身をも住吉の松はさりともおもひしるらん

むかし歌合に社頭月といふことをよみ侍り
ける

右大臣

ゆふかけし松のいくよとひて逢昔をうつすやすみのえの月

俊恵法師

住吉の松のゆきあひのひまよりも月さえぬれや霜はおくらん

廣田の社の歌合とて人々よみ侍る
時社頭雪といふことをよみ侍ける

権大納言実国

さしなくも雪ふりしてゆふかけてかりいつれ榊の梢なるらん

ありまのゆふしのひて御幸侍りけるにとも
侍りけるに社の御神をみまへの御神と
なん侍りけるをりめのふかきつけて侍る

按察使資賢

めつらしきみゆきをとこわの神ならはしるしありまの出湯なりけり

熊野にまうして侍りける時発心門の王子にて
よみ侍りける

権中納言経房

嬉しくも神のちかひをしるへにて心をおこす門はいりぬる

三輪乃社にて千首哥をよみ侍ける

僧都範玄

秋かせを霧こもまよふ三輪の山神のしるしもかくれなきかな

ある人によみしぬるとなけきさせて侍ところの社に詣して侍けるとき二子三百首をたてまつり

けるとき貴布祢の社にまうてゝ

きしらふかきつを侍けり

平實重

今まてになとしつむらんきふね川かはかりはやき神をたのむに

かくてのちなかくて蔵人になり侍りける

崇徳院乃御時なり

かさなれるをまかりて侍けるをおもしろき社の禰宜によろこひ申すとて社よりかへ

つかへ侍りける

賀茂政平

はかなくもたのむそこゝろゆふたすきかゝる思ひを神もしるらん

そのゝち禰宜になんまかりなりにけり

百首乃哥乃中に神祇乃こゝろをよみたまひけり

式子内親王

さりともとたのむ心は神さひて久しくなりぬかものみつかき

賀茂の社にて歌合とて人〳〵よみ侍りける時述懐の歌によめる
かものしけやす
君をいのるねかひを空にみてたまへわけいかつちの神ならは神

なかしき社の後番の歌合の時月の歌とて
皇太后宮大夫俊成
貴布禰川玉ちる瀬〳〵の岩浪に氷をくたく秋の夜の月

述懐の歌よみ侍りける
法印慈円
我たのむ日吉の影は奥山の柴の戸まてもさゝさらめやは

日よしの大宮にまゐりてひくとよみ侍ける
法橋性憲
やはらくる鷲のたかねにすむ月の光をやとす志賀のさゝ浪

日吉の社に法華経供養侍りける時雨のふりけれはそのよきふなりてなけきつゝよみ侍る
中原師尚

叡岳すみたゝれくに雲晴て空に日吉の遠をみて
高野の山をとゝみかくれのち伊勢に詣て
のちに山をくれに侍けるにさ神宮の御山を
も神路山とや大日如来の御垂跡をとひて

よみ侍ける　慶運法師

ゆく人の神ちかひをくと思ひしに文をかきそめしみやこの松かせ

治承四年遷都のときに世をそむきまかりて

いりてふるさとのことを思しや侍てよみ

侍ける　大中臣為定朝臣

月よみの神してらさはあた雲のかゝる浮世もはれさらめやは

そのゝち世中なをり侍りけるに

いそのかみふるの屋しろの合よりて人くゝ[illegible]

侍りける時社頭月といふ心をよめる

能蓮法師　俗名能盛

霞のこさよふかれのあさせにはやとる月さへすみまさりけり

長元九年後朱雀院の御時大嘗会主

基方の神あそひの歌丹波国神南備山を

よめる　藤原義忠朝臣

ときはなる神なひ山の榊葉をさしてそいのるよろつ代のため

治暦四年後三条院御時大嘗会主基

方の神楽の歌いまや山をよめる

藤原経衡

うこきなく世をそ祈るいまや山なる榊葉の色もかはらて

寛治元年堀河院の御時大嘗会悠紀方

の神あそひの哥祝神郷とよめる

前中納言匡房

いかにへの神は世よりもかはらぬめの祝は君か代のためなめ

久寿二年後院の御時の大嘗会悠紀方の

神楽の哥近江国木綿園とよみ侍ける

宮内卿永範

神からとよめありけにゆふその日かけてそさまかつらさき

嘉応元年高倉院御時大嘗会悠紀方の

神あそひの哥近江国守山とよめる

とてきさやとを万代の神とみかとそつかまつりつる山あゐそれ

寿永元年大嘗会主基方にてよみく

なりける時神楽の哥丹波国神南備山

とよめる

権中納言兼光

みゆきふるいはよりも神さふるいの山の榊とらはみそすゝ

元暦元年今上の御時大嘗会悠紀方

にてたてまつりける神あそひの哥近江国祝

神郷とよめる

藤原季経朝臣

しらぬよゐまそるかせしをとやちよのためよと

おなし大嘗会主基方の哥よみてたてまつり

けるに神楽の哥丹波国千年山とよめる

在原光範朝臣

ちとせ山神の代にきる榊葉のさかへまつりはいさみみちあめとつ